The Japanese Geotechnical Society

座談会

「地盤工学会論文報告集（SOILS AND FOUNDATIONS）」懇談会

「地盤工学会誌」編集委員会
平成21年10月19日（月）
地盤工学会会議室

出席者（敬称略，発言順）
石原　研而（S&F 元編集委員長）
三村　　衛（会誌部長）
吉見　吉昭（S&F 元編集委員長）
渡辺　　隆（S&F 元編集委員長）
岸田　英明（S&F 元編集委員）
仲野　良紀（S&F 元編集副委員長）
太田　秀樹（S&F 元編集副委員長）
澁谷　　啓（S&F 現編集委員長）
川西　智浩（会誌編集委員）

石　原　氏

○**石原**　S&F が最初に出ましたのが1960年ですので来年で50年を迎えるということで，来年の12月号を対象に特別号を出版するという計画になっております。その中身について Soils and Foundations（以下 S&F）の編集委員長の澁谷先生（神戸大学）にご検討いただいているのですが，その中身の概略について1か月半くらい前に学会で，現在の編集委員会の方々と吉見先生と私が参加して，まず第1回目の懇談の予備会のようなものを開きました。そのとき，発刊以来，委員長あるいは副委員長を務めていただいた先生方に一度お集まりいただき，昔のことを思い出していただいて編集材料にしたいと考えたわけです。その会合が，本日開催されたという経緯です。

三　村　氏

○**三村**　石原先生からご紹介がありましたように，去る9月1日（火）に地盤工学会会議室において，浅岡会長，S&F の編集委員長の澁谷先生，吉見先生，石原先生，時松先生，東畑先生にご出席を賜り，私も会誌部長という立場で同席させていただいて歴代委員長懇談会を開催いたしました。

まず澁谷先生から，来年の Vol. 50, No. 6 を50周年記念特集号に充てることをご紹介いただきました。出版は，2010年12月です。Géotechnique の Diamond Jubilee Issue に準拠したものをお考えとのことでした。具体的には，Part Ⅰ と Part Ⅱ に分け，Part Ⅰ では吉見先生と石原先生に "Personal View" という形で，S&F の歴史と経緯についてご執筆いただきたいということです。また，近年の大規模プロジェクトなども積極的に取り上げるとともに，アドバイザリーパネルとして外国人の方々にも編集に正式に携わっていただいておりますので，Jamiolkowski（ヤミオルコフスキィ）先生や Muir-Wood（ミュア・ウッド）先生をはじめとする S&F に貢献をされた先生方には，祝辞のような形で短い文章をご執筆いただく予定であるとのことです。

続いて Part Ⅱ では，"Past, Present & Future" をキーワードとして，それぞれの学術分野の State of Art をまとめて紹介いたします。ここでは，執筆者を権威ある先生方に偏ることなく，40歳代前後の現在まさに活躍中の先生方に連名者，著者として執筆していただくような形にいたします。その際，世界に日本の地盤工学の水準をアピールする機会として，日本独自の工法を持つ分野である，地盤改良やトンネルといった分野を取り入れるように致します。ご執筆にあたっては，地盤工学会誌2010年1月号「地盤工学の最近10年の歩み」が良い参考資料となると思われます。

一連の議論の中で，"Personal View" の部分について歴代の委員長には様々なお話しをしていただきましたが，石原先生から，S&F の黎明期からをご存じである方々からのお話しをお聞きして，参考としたいという強いご希望があり，本日この会を開催するに至ったということです。

川　西　氏

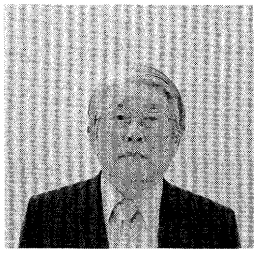
それから，石原先生から，こうした機会にお話しいただける内容は非常に貴重なものであるので，地盤工学会誌にも座談会記事として掲載しましょうとご提案をいただきましたので，よろしくお願いいたします。

○**石原**　本日の主な目的はむしろ Part Ⅰ の方で特に1960年代，70年代，できれば80年，90年と S&F の編集責任者としてどういう特徴的な傾向があったのか，あるいは画期的な変更あるいは事件があったのか。その辺の思い出，ご意見を中心にまずお一人ずつお伺いし，その後，それをたたき台として議論に入るというのはどうでしょうか。先回ご出席になりました吉見先生からまずお願いします。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

○吉見　委員長は最上武雄先生が初代ですね。私はアメリカから帰ってきた当初か，あるいは行く前だったか忘れたのですが，最初は1960年でしたか。だから，始まったころはまだ私は日本にいたのです。それで，しばらく留守にしまして64年に帰ってきました。そういうことで，初めのころは私は知らない部分があります。



吉　見　氏

それで，最初はSoil and Foundationと単数だったのです。「s」が付いていなかったのです。その後いつか「s」を付けることになったのですが，最初は年に2回の発行でした。はじめは論文を集めて編集するのになかなか苦労しまして，必ずしも6か月置きとはいかないようなこともあって，古いものをごらんになるとわかりますが，発行の月がイレギュラーになっている部分があります。そういうことで，最初は論文を集めること，それからとにかく英語で書くわけですから，その辺の言葉の問題ですね。書く方も，英語の論文を書くのは億劫だという時代ですから，なかなか論文を集めるのに苦労をしました。

それからもう一つは，まだ何と言っても名前が売れていませんから，権威というか，ほかの学会の既存の論文集と比べてどうかと心配される方もおられました。それで，年2回の発行で何とかやっていったという時代が続いたのです。

それで，話は飛びますが，1972年ごろに当時の会誌部長であった三木五三郎先生のご発案だと思いますが，それまでは英語だけの論文集だったのを日本語の論文も入れて学会の論文集とすべきだということになって，国内向けには土質工学会論文報告集という名前になって，その中の英語の部分だけをSoils and Foundationsという形で海外の購読者に送ったというようなこともあったんです。

私はその当時，S&Fの委員長をしていたと思うんですが，実は日本語でも論文を書けるということになったら英語の論文をやめて皆，日本語になってしまったらどうしよう。S&Fがなくなってしまうのではないかと，ちょっと心配をしていたのですが，それは杞憂に終わってそういうことは起こらなかったのですね。

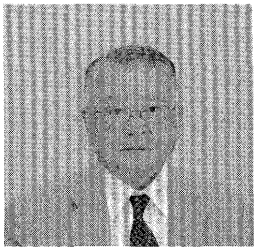
それをいろいろ考えてみますと，私も随分いろいろな若い研究者の方に英語で論文を出してくれと勧めたのですが，それを出した方が出した後で海外からの反響がいろいろとあるのですね。それを非常に喜びまして，これは面白いというか，国際的な反響があるとやはり英語で書くべきだというふうに思われたのではないかと思うのです。いずれにしても，日本語の論文も出せるけれども，日本語の論文はあまり増えないで英語の論文は続いて投稿されたということがありました。

その辺のいきさつは，渡辺先生にお願いします。

○石原　それでは，次に渡辺先生，今，資料が配られているのですが，初代の委員長は最上先生，それから都淳一さん，それから渡辺先生が1962年から65年までやっていらっしゃいますので，その初めのころあるいは都さんのことも含めてお願いします。

○渡辺　Soil and Foundationからちょっと離れるかもしれませんけれども，私は地盤工学会が設立されたころからのいきさつを申し上げます。

まず，戦後にテルツァーギ・ペックなどの教科書がどんどん日本に入ってきて，土質工学がこんなに変わったのだということで，それを普及させようと土質工学会を創ったわけですが，そのときに普及を目的に『土と基礎』を発行したわけです。



渡　辺　氏

雑誌の発行ができたら，今度は任意団体よりもやはり一人前の学会として活躍しようじゃないというので，次に社団法人になろうという動きがあり，社団法人となりました。次に論文として認められるような雑誌をつくろうじゃないか，レフェリーも付けて，ちゃんと論文として認められるような雑誌を英文でつくろうじゃないかという話が持ち上がってきて，それからSoil and Foundationの発刊に至ったんだと思います。最初のものは1960年くらいですか。

○石原　60年ですね。社団法人になった後ですか。

○渡辺　後です。それで，最初は論文を集めようとしても，先ほど吉見先生からお話しがあったように，なかなか論文が集まりませんで，集まった論文もあまり世界的には注目を集めていなかったのです。

私が委員長のころだったと思いますが，新潟地震が起きまして，液状化が大分世界的に問題になりました。その当時，アメリカでもアラスカの地震が起きまして，あちらも液状化が問題になったものだから，日本で日米科学技術協力会合が行われ，米国からシードさんなどが来て，向こうの人達はアラスカの話を，我々は日本の新潟地震の被害の話をするという会合を持ちました。

その会合の論文集は，アメリカ側は非公式な会合だからペーパーとして残さないでもいいという話でしたけれども，我々はこちらの英文雑誌に載せたらいいのではないかと，英文雑誌の1966年のNo. 2に載せました。また，1966年のNo. 1は新潟地震の特集です。この頃はまだ「s」が付いていないのですけれども，Soil and Foundationは新潟地震の特集をやりましたら，ばかに売れて品切れになってしまいましたが，海外からも写真などが珍しいものですから送ってくれと頼まれました。新潟地震のお陰でSoil and Foundationが世界的に認められたということがございました。

それから，吉見先生が帰ってこられて「s」が付いていないとおかしいのじゃないかというので「s」が付いたという事情だったのだと思います。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

先程都さんが委員長をやられたという話がありましたが，その頃の事情をお話しします。英文雑誌の創刊も学会の世話役の最上先生がお忙しいので，留学から帰られた都さんが，日本でも英文雑誌で世界的に発表する場をつくろうと非常に熱心だったので，都さんに委員長をお願いしたのでした。

ただ，都さんが意外と早くに亡くなられまして，それで急遽私が交代したような格好になったわけです。

○**石原**　それでは，次は岸田先生にお願いいたします。私もたまたま岸田先生の論文を最近読む必要があって今ここにコピーを持っているのですが，「スチールとドライサンドのフリクション・レジスタンス」，こういう立派な論文を1986年に出していらっしゃいます。これは最近，方々でリファーされています。そういうことも含めてよろしくお願いします。

○**岸田**　皆さんのお手元に「歴代の編集委員」という表があると思いますが，S&Fというのは吉見先生がいらっしゃらなかったらこれほど立派にならなかったと思うんです。本当に吉見先生はえらいご苦労をなさっていました。それで，私は恩恵を被ってS&Fに論文を発表させていただいて，結局考えてみると建築学会の論文報告集にも幾つか書いていますが，国際的に引用されているのは圧倒的にS&Fなのです。ほかのものはあまり引用されていないです。あとは国際会議とか，そういうものはありますけれども，建築学会の論文報告集は図書室で建築の方にいってしまうのです。だから，杭なんかの論文を書いてもだれも見てくれないのです。

岸　田　氏

そんなこともあって，私はむしろS&Fのお陰で随分いろいろなことができたと考えております。それはやはり吉見先生が1966年からすごく苦労をなさって立ち上げたわけです。

私は1969年から編集委員会に入りましたけれども，吉見先生を始め皆さんのお仕事を見ていて，こんな大変な仕事はないと思いました。その中心が，吉見先生だったということをお話ししておきたいと思います。

大崎順彦さんや小泉安則さんはこの編集委員会には出ておられなかったですけれども，建築研究所で基礎関係の中心だったのです。特に新潟地震のときは大崎さんが中心になって実際の調査をされて，それから小泉さんが限界N値という考え方をお出しになっているとか，地震の後で全数調査をやったのはあれが日本で初めてだと思うんです。

○**吉見**　新潟地震のときの大崎，小泉両先生の話なのですが，私も古い話で記憶が定かではないのですが，熱海かどこかで合宿というか，泊り込みで編集委員会みたいなものがあったような記憶があるんですが，渡辺先生いかがですか。

○**渡辺**　そんなことが一度ありましたね。あれは日米会議の報告も含めていたのだと思います。

○**石原**　それでは，ご自身で投稿された論文について簡単にお伺いしてよろしいですか。

○**岸田**　たしか博士論文を最上先生に言われて，とにかく英語でS&Fに出せと言われた。それが最初に出したものでしょうか。ちょっと忘れてしまいましたけれども，石原さんもここに書いておられますね。本当に最初のころは原稿が集まらなかったですね。

○**石原**　そうですね。出せ出せと言われましたね。

○**仲野**　私はS&Fの恩恵を受けた方で，立ち上がり当時の苦労は知りません。S&Fが創刊されてから7年くらい経ってから投稿したのですが，実は学位を取るには英文の論文がなければ駄目だと言われたので，しようがなくて書いたものです。当時の土質工学会からS&Fへの英文投稿の勧誘の手紙が来ていたことも，そのきっかけになったと思います。ゲラ刷りを見ると私の下手な英文も修正されており，大変有り難く思いました。英国留学中の1969年にノルウェーのオスロのNGIを訪問した折，所長のBjerrum（ビエラム）にこの論文の別刷りを前もって送っておいたところ読んでいてくれたらしく，面白い論文だと言ってくれました。この頃日本では1964年の青森県西方沖地震，新潟地震，1968年の十勝沖地震など地震が多発していて農林省（現・農林水産省）関係では軟弱地盤上の八郎潟の干拓堤防の1m以上の沈下や軟弱層基礎地盤の液状化，橋脚の移動など種々の難しい問題が生じましたが，農業土木関係では地震関係の土質工学の専門家はあまりいなかったので，対策立案のための土質委員会を農林省（現・農林水産省）から地盤工学会に委託しました。私は未だ若造であり，この分野の専門家ではありませんでしたが，当学会の調査部委員として委員の方々の議論の議事録作成のために参加しました。この件では学会も得ることが大きかったと感謝されたとの事を聞いています。

仲　野　氏

私は昭和32年（1957年）に農林省農業技術研究所農業土木部（現・農水省農業工学研究所）に入ったのですがその翌年に地すべり防止法が成立したこともあり，農地の地すべり対策が私の属した研究室のメインテーマになりました。第三紀層の母岩は泥岩の場合が多いのですが，その力学的研究論文はほとんどなかったので，自分なりに考えて物理化学的な見地からの研究を行い，泥岩が軟弱化するのは一種の溶解現象だとの結論に達し，S&Fに投稿したわけです。その当時，ソ連のレルトフとデニソフという研究者が，誘電定数の大きい液体に泥岩を浸すと泥岩が破壊すると国際土質工学会論文集に発表していましたが，誘電定数の大きいニトロベンゼンに泥岩を浸しても壊れないので，私はS&Fにこの説を否

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

定し，水素結合による破壊だと発表したのです。この論文はその後7年くらい経ってからMorgenstern（モーゲンスターン）がアメリカの土木学会誌ASCEに引用してくれ，この他にも幾つかの欧米の論文集や著書にも引用されS&Fの影響力の大きさをつくづく感じました。

この当時の泥岩の基礎的研究がその後トンネルやダムなどいろいろなことに応用できるようになりました。研究者にとって処女論文が一番大事だとよく言われますが，そのとおりだと思います。

○石原　仲野先生にお伺いしたいのですが，農業土木関係で手島渚先生とか高瀬国雄先生とかいらっしゃいましたね。そのほかの方もいらっしゃいましたが，そういう方のことをちょっとお伺いしてよろしいですか。

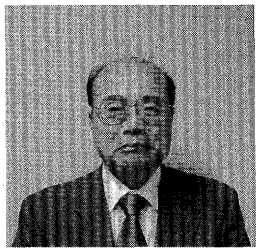
○仲野　手島さんは当時農林省の技官でしたが八郎潟干拓堤防の一部で昭和34年（1959年）に大規模な現場堤防破壊実験を行い，予想どおりの盛土高で破壊したと興奮気味に話していたと聞いています。高瀬さんはフィルダム関係で大変貢献されました。昭和30年代は農林省の材料試験室で，公務員の技官が中心となって調査・実験を行っており，報告書はほとんど日本語でしか発表されませんでした。

○石原　特に八郎潟ができたでしょう。あのときの調査に関係したコーンの論文などが結構出ているような気がするのです。

○仲野　八郎潟の堤防路線を決めるため，全域にわたり方眼を組んでコーンペネトロメーターでサウンディングを行い，砂層の部分では標準貫入試験を行うことにより，全域地盤の土質状況を明らかにし，堤防の比較路線を効率的に描くことができ，工費の節約に役立ったと言われています。干拓によって造成された圃場にコンバインやトラクターなどの大型機械の走行に耐える地耐力があるかどうかのチェックにもこの種のサウンディングが大変役立ったと言われています。このような施工事例がきっかけとなり，その後現場の調査，試験，施工結果などの報告書がかなり出るようになりました。

○石原　それでは，太田先生，最近の状態なども含めてお願いいたします。

○太田　最近何もないのですが，吉見先生が委員長でいらして私におっしゃった言葉を覚えているのです。吉見先生は職務がおありで，次はおまえが英文校正をちゃんとやりなさいよということをおっしゃいました。当時日本人が書いている英語というのはやはり相当不完全でちゃんとした英語に直さなければならない。



太　田　氏

吉見先生は，東工大のアメリカ人を紹介して直してもらうというようなことをやっていらしたのですが，元の論文をそのまま見せても直せないというか，わからない。文章になっていないものがいっぱいありました。それで，それを直せるようにしろというのが私の仕事でして5，6年，長い間やったと思うのですが，すべての投稿論文が全部私のところへ送られてくるのです。それを全部直すのです。それで，1週間に二つ位ずつ来ていたのですが，あれはしんどかったです。あれほどS&Fの論文を全部読んだ時期はなかったです。しようがないですので，全部読みました。

そのときに思いましたのは，例えば私が直すのですけれども，その直し方というのが大変難しかったです。文法的におかしいとか，単数だとか複数だとか，そういうものを直すのは機械的にできるのでしょうけれども，ちゃんと意味がわかるようにしようとすると主語から変えなければならないということです。

日本語を直訳してざっと英語に直していくと，途中で文章にならなくなる。我々がしゃべっているとよくそういうことがありますが，それと同じことが書いている文章にも出てくる。ですから，直そうと思うとその文章を全部変えなければならないということになるのです。それが外人の校正者にとってやりにくい仕事なんじゃないか，面倒臭い仕事であろうと思いました。そういう人たちが直しやすいような英語をつくるというのが私の仕事でした。

そんなところが思い出ですが，そのときにやはり日本人にとって得意な英語の分野というものがあるなと思いました。例えば，一番英語にしやすいのは理論ですね。仮定があって，式をごちゃごちゃやると結論が出てきて，それを直すとこんな感じだとか，そういう論文は書きやすい。それで，次に書きやすいのは多分実験じゃないかと思います。こういう材料でこういうふうにやってというパターンがあるのです。

そういうものは人の論文を見ながら皆さんはお書きになるのでまあまあの感じになるのですが，難しいのは現場ですね。例えば，さっき新潟の特集の話がありましたね。私もさっきぱらぱらと見て，こんなものがあったなと思っていたのですが，あれには理論などは何も入っていないです。こうだったという現場の状況の説明ですね。これを英語で書くというのは大変難しくて，どこどこがねじれていたとか，そういうようなものは英語でどう言うのだかわからないことがいっぱいあります。それとか，小段だとか，犬走りだとか，そういうたぐいの言葉が英語でわからないとかということはあったと思います。

S&Fも，現場の論文がもっと出るべきだろうと思います。読者もそういうものを求めていると思いますが，それが日本人にとって一番英語で書きにくい分野だということで，何とかいい工夫がないかと思いました。

○石原　今のことで思い出したのですが，地盤工学会がS&F以外も含めて発展したことの一つの大きなベースとして，用語とか単位とか，そういうものの統一があったんじゃないかと思うのです。これは，コミュニケーションのインフラの整備ということになるので，非常に大きな出来事ではなかったかと思います。

それで，今ちょっと太田先生がおっしゃった中で日本

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

語と英語の関係が出てきたのですが，英語と日本語の専門用語の単語集というものが地盤工学会から出ていますね。あれはいつごろ出たかというのは鈴木さんもご記憶にないですか。

○事務局　では，初版を調べてまいります。

○石原　後でもいいですが，それを後で教えてください。そういうものも非常に重要なファクターではないかと思うのです。

一応，先生方のお話しをお伺いし終わったわけですが，私の方から幾つか申し上げたいのは，まず最初に外国人が投稿されたのはいつですか。あるいは，だれであったかということも調べればわかると思うのですが。

それから，主としてS&Fに基づいて日本の学会の論文賞をもらった最初の方は，多分インペリアルカレッジのJardineじゃないかと思うのです。それから，その次がJamiolkowskiとかBurlandのピサの斜塔，この二つではないかと思うんです。このお二方については，特に熱いメッセージをいただきたいと思っております。それから，S&Fができたときには，Canadian Geotechnical Journalというものがあったかどうかです。

○吉見　なかったと思います。新しいと思いますよ。調べればわかることですけれども。

○石原　これも非常に大きなファクターですね。

それから，多分1963年に第3回のアジア会議が東京の国際文化会館で開かれましたね。あの会議とS&Fの関係がどうなっているか。あの会議は大崎先生がチェアマンをされたのですね。それで，1963年だから新潟地震の前ですね。その結果がS&Fに書いてあるかどうか。三村さん，後で調べられますか。

○三村　最初に掲載された外国人執筆の論文は，1963年8月号の，R. L. Kondner, R. J. Krizek and B. B. Schimmingによる“Lateral Stability of Rigid Poles Subjected to an Applied Couple”です。

○石原　これは，どなたかが勧誘されたのですか。これは都さんが委員長の年ですね。

○三村　同じ号に，吉見先生とJames. H. Poellot氏の論文があります。

○吉見　それは，カーネギー工科大学の学生です。

○三村　今ご紹介しました2編の論文が初めて外国人著者によってS&Fに掲載されたものとなっています。

○吉見　ある時期，外国からの投稿というものが非常に多くなって，まだ土質工学会の時代ですが，谷藤会長の時代ではないでしょうか。理事会で，次号のS&Fの題目と著者，目次が資料として出るわけです。そうしたら，何だ，これは外国人ばかりじゃないかと怒られたのです。何とかしろと言われた。何とかしろと言われても，むしろ論文集というのは非常に重要なものであるということで頑張ったんです。そういうコントロールをするつもりはないと言って，最近でもかなり多いですね。

○岸田　私は英語の言葉の問題よりも自己主張というか，論理構成がしっかりしている。結局それは文化につながるのだけれども，それが日本人は弱いから，特に現場で仕事をされている方などは普通の考え方で日本語で書いちゃうでしょう。そうすると，論文にならないのです。主語，述語というものがきちんとして論理構成がはっきりしていれば，あとは英文の問題だから，それはだれかに直していただけばいい。

ある人に，英語に直してくれないかと論文を見せたときに，もともと彼は日本語も英語も両方できるのです。そうしたら，日本語のは論文じゃないよと言っていました。

○石原　それから，もう一つ私の感触として申し上げたいのは，新潟地震が契機になったのじゃないかと思うのですが，どちらかというと日本の研究者の目は粘土よりはむしろ砂の方に向いていたのではないかという気がするのです。そういう砂についての液状化も含めて，あるいは変形特性とか，そういう論文が最初は少ないと思うのですが，70年とか80年くらいからだんだん増えてきたのではないかと思って，その辺の進歩についてもこのS&Fは貢献したのではないかというふうな位置づけはできると思っているのです。

インパクトファクターは時松先生が熱心に一時調べていただいて地盤工学会誌に載ったことがあるのですが，最近少し落ち目になっているのだということを澁谷委員長は言っていらっしゃいました。

○三村　ほかの諸雑誌につきましては，Géotechnique（ジオテクニク）であればGéotechnique, ASCEであればASCEの論文，Canadian Geotechnical Journal（カナディアン・ジオテクニカル・ジャーナル）であればCanadian Geotechnical Journalに掲載されたものを引用するようにという指示を著者にされているようだということをお伺いしたことがあります。一つの戦略かもしれません。こうしたことが必要なのかどうかわからないのですが，引用によってインパクトファクターは高いポイントが得られるということですので，もし影響力が非常に大きいということであれば，投稿される方もその辺りを考えていただくことも必要なのかもしれません。

○石原　大体，先生方のご意見を一とおりお伺いしたわけですが，そのほかにS&Fを昔から読んでいらっしゃる先生方について，中身というか，論文の質というか，投稿者の傾向というか，何か時代の流れに応じた変化のようなものをもしお感じであればお伺いしたいのですが，いかがでしょうか。これは，いい面でも悪い面でもどちらでも結構だと思います。

○岸田　暴論ですけれども，私が土質工学会から地盤工学会を通じて感じていることは，初期のころは基準とか，そんなものは何もなかったのです。だから，『土と基礎』を読まなければ設計できないし，それからS&Fも比較的現場の記録が多かったような気がするのです。それが，だんだんどこの学会もそうですけれども，設計指針とか……。

私は，共通のベースをつくるために実験の指針というか試験の指針は必要ですけれども，設計というのは絶対要らないと思うのです。設計者もそれぞれ自分の判断で

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

勉強して設計すればいいのですから，それを学会がそういう基準をつくり出すと，皆それさえ満足していればいいやということで勉強しなくなっちゃうのです。ちょっと暴論かもしれないけれども，一般の技術者にとって基準は便利だけれども，責任逃れ，免罪符になるわけです。そんなことをちょっと最近，感じています。

○**仲野**　各省庁でも設計基準というものが昔は細かく書いてあって，そのとおりにやればよかったのです。最近はそれでは民間の技術が発展しないというか，使えないことがあるので，設計基準そのものはごく当たり前の原則論のようなことしか書いていなくて，後ろの方に技術編というものがあって，それに非常に具体的なことが書いてある。だから，必ずしも従わなくてもいいということです。そういうふうになってきています。

○**岸田**　それは，農業土木や土木ではコンサルタントエンジニアが職業として認められているからいいのですが，建築の場合は建築基準法という完全な法律体系がありますから，建築センターとか，そういうところの影響力はものすごく大きいです。それは何かというと，皆，学会の設計指針などから適当に引っ張ってきているのです。

○**石原**　実は，私と吉見先生がS&Fについて何か文章をまとめるように依頼を受けて，さあどうしようかと思って困っているのです。ジオテクを見るとあまりにも立派に書いてあるので，とてもあんな立派なものは書けないなと思っているのですが。

○**太田**　さっき石原先生が，このS&Fには砂の論文が比較的多いと言われましたが，それが引用されている度合いも確かに多いですね。いろいろな外国の雑誌でS&Fの日本人の論文が引用されているのは，砂関連と液状化関連の論文がやはり多いと思います。これは，日本の中でそういう問題が多かったからですね。そういうものは，S&Fの売りではないでしょうか。生き残るためにもそういう部分はもうちょっと強調してもいいと思います。

○**石原**　ただ，粘土もいろいろな埋立ての圧密沈下とか，関西空港もあったし，瀬戸内海の埋立てもありましたね。課題としては結構あったし，S&Fにも載ってはいるのですが，全般的な傾向としてですね。

○**太田**　引用されている度合いは，やはり砂が多いですね。これは外国では少ないのだと思います。

○**石原**　どちらかというと，粘土が土質力学の歴史では先行しているのです。圧密とか，せん断強度とかですね。砂は後で出てきた課題ですから，そういう傾向はあるんじゃないかと思います。

○**吉見**　液状化が問題になる前は，砂は支持力としては心配ないという概念でしたね。ϕがある程度あれば，押せばどんどん強くなるのだということでしたから。

網干壽夫先生の大型圧密実験などというものはなかなかユニークな研究ですね。太田先生の理論も随分引用されているんじゃないですか。S&Fのどこの雑誌に出たのかはわかりませんけれども。

○**太田**　あれは，関口秀雄さんが書いたのですよ。私ではないのです。

○**吉見**　私はそれに関連して思いますが，やはり海外でS&Fの評判はどうかと非常に気になっていたんです。それで，海外の著名な大学の図書館などに置いてあるかなと思って行ったら，大抵置いてあるんです。しかも，製本をしてずっと書架に並んでいるんです。新着雑誌のところにも置いてあるというので安心した記憶があります。

○**仲野**　私がインペリアルカレッジに1年間留学したとき（1969年）にも図書室に置いてありまして嬉しかったことを覚えています。

○**石原**　でも，置いていないところもあるのです。中国のハルピンに力学研究所というのがあって，あそこには結構大きな図書館がありますけれども，ジオテクはありましたが，S&Fはなかったです。時々そういうのは見かけます。

だから，購読者の変化がどういうふうになっているのか。日本人とそのほかを含めて，統計を整理してみてはどうでしょうか。

○**吉見**　単なる数だけではなくて，大学を含めて主要な研究機関にどれほどいっているかということが本当は重要だと思うのです。そこに1冊あれば大勢の人が利用しているはずですから，利用者の数は多いわけですね。

○**吉見**　それから，これは全く別のコメントですけれども，最初のうちはやはりディスカッションが重要だということで委員会としてかなり勧めたのです。別刷りを送ってディスカッションを書いてもらう。多少その努力のかいがあって，ディスカッションは割合多いと思うんですが。

○**石原**　何か一つの年代表みたいなものをつくるとよいしょう。いつSoils and Foundationsになったとか，いつ論文集とSoils and Foundationsが分かれたとか。

○**澁谷**　議論をしてできたものがありますので，それに対してご意見をいただければと思います。

澁　谷　氏

○**石原**　こういう雑誌を出そうという最初のきっかけは最上先生とかですか。

終戦後，ケイシーさんという方から連絡があって，それで国際学会のメンバーになりましたね。あれよりも後ですね。最初に本当の言い出した方々のお名前がもしわかれば非常にいいのですが，これはなかなかわからないでしょうね。

○**吉見**　そんなに古い委員会の議事録などは保存していないんでしょうね。もう50年も前ですから。

○**渡辺**　少なくともS&Fができる前の『土と基礎』の編集委員会で英文雑誌の話が出たのです。その頃の『土と基礎』の編集委員会の初代委員長の谷藤正三さんとか鉄道の都さんなどが考えられます。

○**石原**　出版社はどこが担当していたのですか。これは，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

学会で出していたのですか。

○吉見　丸善かどこかで印刷していませんでしたか。活版印刷だったのですよね。プロの製図屋さんが図面を書いて。そんな記憶がありますけれども。

○石原　富樫さんのフォワードによると，S&Fは国際学会の中における日本のナショナルコミッティの活動の一つと考えられると書いてありますね。ですから，これは1960年ですけれども，1959年に土質工学会が10周年を迎えたということも書いてありますね。10周年を迎えた次の年から出したということです。そういうことで，このS&Fの発行は10周年の記念事業の一つというふうに位置づけているということが書いてありますね。

○吉見　多分，富樫凱一さんが会長だったのでしょうね。

○渡辺　最初のころの原稿は，ともかく頼んで頼んで頼みまくって書いてもらったのです。

○石原　我々からして見ると，昔の方が読みやすいのです。写真は結構大きいし，字も少ないし。

○吉見　今も文部科学省から補助金をいただいているのですか。助かりますよね。

○石原　いつからどのぐらいもらっているのですか。

○澁谷　1997年度に370万円の交付を受けたのが始まりです。木村孟委員長・日下部治副委員長のときに初めて申請されたと記憶しています。その後，2006年度の780万円をピークとして，2009年度の660万円まで継続して交付を受けております。先日，初めて学術振興会の方が学会に様子を見に来られました。学術出版物に対する助成金の総額が毎年減少する中で，個々の学術誌のレビューをきっちりとして，交付金継続の是非のための資料とします，という趣旨で来られました。事務局ともども対応したのですが，結果としてSoils and Foundationsは非常に高い評価を得ました。海外にも相当数の購読者がいる点，当該分野におけるクオリティー誌としての国際的な名声を確立し維持している点，等が高く評価されました。これは，ひとえに歴代の委員長・副委員長をはじめとする編集委員会委員のS&Fに対する愛情とご努力の賜物だと思います。悪い例になりますが，現行の助成対象誌の中には，印刷部数の8割近くが残部となっているような学術図書もあるようで，S&Fは残部数も少なく，発行部数も適切だということでした。

○石原　これは何部くらいですか。

○事務局　現在1 600部です。

○石原　そういう意味では，インパクトファクターは大きいですね。

○澁谷　そうですね。編集委員会としては，インパクトファクターの値を絶えず気にしています。インパクトファクターが高いと投稿数も増えますし，結果として掲載論文の質も向上すると思います。

○石原　やはり文科省の評価が高いというのは非常に重要だと思うのです。

○岸田　ちょっとよろしいでしょうか。歴代の編集委員の一覧表がありますね。そこで，先ほどどなたかがおっしゃったのは，いわゆる地盤工学会の論文報告集に取り変わる時期ですね。それが1972年，昭和47年だったのです。

それで，ここに書いてあるけれども，1971年のころから吉見先生にお話しがあって，三木先生が会誌部長で最上先生が随分ご心配されて，論文報告集になったら皆日本語で書いちゃうんじゃないか。せっかくここまでS&Fで国際的にもある程度認められたのがなくなっては大変だ。

それで，あのころたしか故中瀬明男さん，吉田厳さんと私が最上先生に呼ばれて，おまえらはもっと勉強してどんどん自分で論文を書けとネジを巻かれたことがあります。

○吉見　そのとき，に最上先生に委員長として再度ご出馬を願ったのです。

○岸田　それで，あとはまた論文報告集をつくるに当たって最上先生が吉見先生の後にもう一遍委員長をやられているのですよね。

○吉見　大事なときだからお願いしますと言ったら，あんただって若くないじゃないかと。

○岸田　先生は若くないけれども，こちらはもっと勉強しろと怒られた。

○岸田　最上先生が再度カムバックされた。S&Fにとっては，これが一番大変な時期だったと思います。

○石原　Soils and Foundationsに統一されたのはいつですか。その後，二つに分かれていましたよね。論文集は日本語と英語と両方入っていて，その後で今度Soils and Foundationsだけになったでしょう。

○岸田　それだけにして，それを外国に送ろうと。

○澁谷　完全英文化は2006年度からで，当時の委員長は東畑郁生先生です。

○岸田　結局，論文報告集で分けたというのは，ある意味で折衷案だったのです。日本語で論文を書きたいという現場の方の意見もあったし，国際的には日本語が入ったものを送るとタイトルが変わってしまってまずい。それで，Soils and Foundationsというタイトルはそのままにして表紙だけ取り替えて中の英文のものを送った。

○石原　それから，最近はSoils and Foundationsと書いて下に「Journal of Japanese Geotechnical Society」と書いてあります。あれを書き出したのも，表紙の変遷を見ればわかるわけですか。表紙を変えた動機みたいなものも，だれかに書いていただくといいのじゃないかと思うのです。

○澁谷　現在は，「地盤工学会論文報告集」という日本語が小さく入っていますが，東畑先生によると，それはデザインの一部であって，SOILS AND FOUNDATIONSが正式名称だそうです。

○石原　前にこういう議論があったのです。Soils and Foundationsと，それからJournal of Japanese Geotechnical Societyに変えたらどうか。これは龍岡さんが本書にちょっと書いておられますが，私がそのときに，大きな表題をJournal of Geotechnical Societyにして，その中にSoils and Foundationsとか，Rock mechanics

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

とか，特別号だとか，そういう少し変わった名前を付けたらいいのじゃないかということも申し上げたのだけれども，やはり外国からの反対にあって，S&Fが定着しているからそのまま守った方がいいということで今の形に落ち着いているということです。

○**三村**　かなり反対が多かったと記憶しています。特に，外国人からは，既に認知されてそれなりのステータスを持っているものを捨てることはないという意見が寄せられ，我々が考えている以上に歴史と伝統の威力は大きいということがわかりました。

○**渡辺**　ちょっと別の話になって申しわけないのですが，S&Fの表題の話ですけれども，最初は英文雑誌をつくろうというときにどういう名前にするかということになりまして，そのときまでに『土と基礎』という雑誌を出していたので，英語版ならばSoils and Foundationsだという話だったのです。えらい単純な話で，土質工学会が『土と基礎』の関係の学会だというので，そういう話になってきたわけです。あまりその他の話はなかったです。

○**岸田**　委員長・事務局がいらっしゃるので，「S&F」の印刷部数や収支状況等を教えてください。

○**事務局**　21年度の実績は次のとおりです。

①　配布状況

印刷部数　：1 600部

購読者配布：1 500部

内訳：会員：900部，非会員600部

（うち海外配布：500部）

②　収支状況

収入：2 500万円

（うち科研費補助金660万円含む）

支出：1 800万円（事務局人件費含む）

収支差：＋700万円

○**岸田**　私のお聞きしたいのは，まず何部刷って何部売れているかということなのです。経営的には，これが一番の基本だと思うのです。

それから，今度ちょうど50周年ですね。織田信長ならば人生50年だけれども，この辺で討ち死にしてもいいんじゃないかという気もするんです。討ち死にするという意味は，今は全部これを雑誌に印刷しているでしょう。2か月に1回ですね。建設業界だとそれほどプライオリティというか，だれがいつどこに発表したというか，公表の時期はそんなに深刻じゃないです。物理とか化学とか，ほかの研究者だったら，1日違ったらノーベル賞をもらえないわけです。

これだけ情報技術が進んできたから，受け付けたら，2, 3か月くらいで，いつ受付というのは当然出るけれども，どんどんインターネットで出してしまって，雑誌は例えば図書室とか，そういうところで雑誌を買ってもらう。

それから，一般の購読者は私個人で言えばどんどんこんなにたまっちゃうわけです。それよりもCD-ROMか何の方がよほど楽だから，そうすれば今，地盤工学ジャーナルかな。ああいう形で，自分でちょっと見て，これは気に入ったなというものをダウンロードできればいいし，そのときにちゃんとダウンロード代はがっちり学会で取った方がいい。それは簡単に取れるはずだから，そんな形でちゃんとS&Fだけで収支が合うようなやり方というのを考えたらどうか。

というのは，今はアカデミックな論文が非常に多いですね。一般会員というのはアカデミックでない技術者の方がたくさんいるわけです。私はその割合が反映されてくるのが一番常識的かなという気もしていて，今はあまりにもアカデミックな方に偏重し過ぎているような気がするのです。その辺はちょうど50周年を契機にお考えになったらいいかなと思っています。

私はあるところでデータベースというものとインフォメーションとは全く違うんだよと。データベースというのはただ整理して積んでおけばいいので，インフォメーションというのはそこから有益な情報をもってきちんと整理しなければだめだと言ったら怒られてしまって，あんたは20世紀の建築学会に出ていた基礎構造関係のインフォメーションを全部集めろと。建築学会の図書室というのは学会ができてから全部のデータベースが完璧にそろっているのです。それで，ちょっと夏休みにやり始めたら目が痛くなってしまって，大変なことになってしまった。が，データベースとインフォメーションとか，そういうことも考えて，特に雑誌の場合は分けられたらどうか。

今は何となくその辺がごっちゃになっていますよね。雑誌さえ取っておけばいいんだという感じで，膨大なデータベースになっている。

○**石原**　どうもありがとうございました。大体時間もまいりましたので，これで終わりにいたします。

NII-Electronic Library Service